



東西しらかわ小学校長会 広報部

第 6 号 令和3年2月3日
 発行人 会 長 菊 池 篤 志

特別支援教育の課題解決に向けて

東西しらかわ小学校長会副会長 根本 秀一
 （白河市立みさか小学校長）

4月にみさか小に着任し、久しぶりに現場に戻った。住宅地の中にあり、保護者の教育に対する関心が高く、地域ボランティアの関わりが深い学校である。前任の仕事の関係で学校の様子はある程度理解していたが課題も多かった。

特に、長年抱えてきた特別支援教育に関する課題は大きく、それ故に、これまでの校長先生方によって、この課題解決のための体制がつくられていた。支援の必要な児童に対する対応によって担任や支援員が疲弊する状態が続いていたためである。

特徴的な取組が2つある。1つ目は、「福島県緊急スクールカウンセラー等派遣事業における福島大学・弘前大学専門家チーム派遣事業」による福島大学 佐藤則行 特任助教による定期的な巡回相談だ。1か月から2か月に1度のペースで来校いただいている。佐藤特任助教は、児童に対する心理面からの授業はもとより、子育て面に課題を抱える保護者に対するカウンセリング、支援学級及び通常学級に在籍する要支援児童の観察とコンサルテーションを行っていただいている。「困った子は困っている子」の立場から、興奮するに至った原因や今の辛い思いを言葉にしてやることで落ち着いていくことや、望ましい行動は小さな事でも見逃さず褒めて強化し、その逆にならないようにすることなど、それぞれの特性に応じた支援について助言をいただくことができる。そして、それらの支援を基に次回の巡回相談で更に助言し

ていただける。言いつばなしではなく、伴奏者として本校の取組に寄り添ってくれるのだ。そのため、担任や支援員が何とか疲弊しないで行われるのである。

2つ目は、支援員のローテーション化及び支援員打合せの定期開催である。多くの場合、支援員は特定の児童につくことが多いが、本校の場合は、ローテーションを組んでいる。5名の支援員が、約1か月程度で担当を順に変えていくのである。理由は、前述したように一部の支援員だけに負担がかかり疲弊しないようにするためだ。そして、ローテーションを変える前に支援員打合せを開き、現状の報告と次の担当に対する情報交換を行っている。校長にとっては支援の現状を細かく理解する貴重な場であるが、支援員にとっては、情報交換もあるが自分の苦勞している状況を周囲に聞いてもらえる場としての役割が大きいと感じている。ありがたいのは、本校における勤務年数が長い支援員ほど、佐藤特任助教の助言が浸透しており、児童を理解し児童に寄り添った支援をしていることだ。

しかし、これらの取組の効果は大きいですが、状況が大きく改善しているわけではなかった。学年が上がり、中学校への進学が見えてくると、事が起きる度にこのままでは…という思いが膨らんできた。しかも、次年度の校務分掌の青写真も描きにくいのだ。方針の見直しを迫られた。そこで、家庭環境の改善が見られてきたことを幸いに、改めて保護者と問題を共有できる関係を築くこと、児童に対しても興奮されることを怖れず自分の特性を自分の課題として受け止めることができるような働きかけを行っていくことにした。

その結果、ここに来て少し明るい兆しが見えてきた。ささやかではあるが、その喜びを、担任や支援員と分かち合う機会も増えてきた。この変化の背景には、見直しの効果とともに、これまで何年にもわたって行ってきた保護者や児童に寄り添った丁寧な対応による信頼関係がある。信頼関係、安心感とても大事である。

これ以外にも課題はあるが、今後も目の前の子どもたちの幸せを願い、校長として課題をとらえ、教職員を支えながら解決に向かっていきたいと考えている。



伝統・特色を生かして

箱根とコロナと今年

白河市立白河第二小学校長 井上久仁夫

今年度はコロナ禍の中、3密を避けながらも、地教委やPTA、近隣の校長先生方との連携を密にしながら各校で工夫した学校経営がなされてきたのではないかと思います。教職員が子どもを第一に考え、一丸となって取り組んできたことは、大変意義深い時間であったと考えます。

さて、各校の子どもたちの様子はいかがでしょうか。本校の553名の子どもたちは、日々数多くのドラマを繰り広げています。楽しいことばかりでなく、生徒指導上の問題になりかねない事も多々あるのが現状です。幸いにも大きな問題になっていないことには、いくつかの要因があります。今回はそれを探ってみたいと思います。

まず第一に、授業作りを学級経営の柱としていくことが挙げられます。過日、第38回学習指導法研究公開を開催しましたが、参観者のアンケートに数多く書かれていたのは、学習規律と指導技術の共通実践についてでした。話の聞き方や話し方、完全反応をねらった発問など、日々の授業の中で他を思いやり、認め合い、全員で授業を作り上げることを徹底して取り組んできました。

2つ目としては、道徳的価値を意識した指導・学級づくりを心がけ、「様々な活動・行事を教育にする」という共通理解のもとに指導にあたっていることです。毎日のように個人やグループ・学級・学年で指導されている場面を見かけますが、「よりよい生き方」指導を心がけています。若い教員が多い本校ですが、そういった指導方法が引き継がれていることも本校の財産・特色の1つです。

最後にあげたいのは、合唱・吹奏楽・陸上の特設クラブでの指導です。4～6年の7割を超える183名が参加しています。指導は全職員で分担し、技術面ばかりでなく、あいさつをはじめ礼儀や規律を守ること、努力を続けることの大切さなど、いろいろな教員が同じスタンスで指導しています。特設クラブは、教職員の共通認識を培う場にもなっています。

研究も心の教育もまだまだ道半ばですが、自校の伝統・特色を強みとして、共通実践を積み重ね、よりよい学校を作っていくためのものです。

棚倉町立棚倉小学校長 鈴木 雅人

「今年の箱根は駒澤大学逆転優勝～！」正月、我が家に響いた中継の声。一本のたすきに思いを込めた走りは感動を与えてくれる。私は、箱根駅伝を見ると、数年前の箱根駅伝にまつわるラジオ放送を思い出す。それは、ある大学の選手の父親からのメッセージを放送していた。その選手は、4年生で主将であったが、メンバー入りができず応援に回ったとのこと、その息子に対しての言葉である。「努力してきて負けたら恥ずべきことではなく、偉いこと。しかし、負けたことに負けないことがもっと偉いこと。」こう言えるこの父親に感動したことを思い出す。それ以来、時々この言葉を頂戴している。

「子どもたちの声を聞いて、楽しい毎日を送る。」そんな、思いをもって学校現場に着任した4月であったが、想像以上のコロナとの戦いが4月22日からの休校措置によって始まった。子どもたちの顔は、マスクで覆われ名前と顔の一致がままならない。感染予防を講じた授業や学校行事、予定の大幅な変更と多数の人が集まることへの抵抗感による数々の予定されたものの中止。その影響で本来保護者とのよりよい関係づくりをおこなうべき夏休み前の時期が、単なる授業時間確保のためだけになってしまった。その上、この休業の影響で子どもたちの生活リズムに乱れが生じ、それを引きずりながら、不登校傾向の児童が増えて1年が終わろうとしている。多難な一年であった。

「コロナに負けるな！」よく言われるが我々校長として、子どもたちに学習の保障をしてきたこと自体はコロナに負けていないと自負している。しかし、様々な変更を余儀なくされ計画通りにいかなかったことや生徒指導上の課題も数々噴出してきた。そういう点では負けたのかもしれない。ただ、それを何とか止めようと努力してきたことは事実である。「努力してきて負けたら恥ずべきことではなく、偉いこと。しかし、負けたことに負けないことがもっと偉いこと。」

ここで、へこたれるわけにはいかない。待ってろよコロナ野郎！子どもたちの学習の機会を奪うんじゃないやね～。強力感染予防策で戦ってやる！

今年一年良い年にしたい。

「校長が代われれば学校も変わる。」って良いの？

子どもたちの何気ない日常を伝える学校通信

白河市立白河第一小学校長 菊池 篤志

白河市立白河第三小学校長 小玉 昭男

校長昇任考査の面接の際、「よく、校長が代われれば学校が変わると言われますが…」と聞かれましたが、そもそも校長が代わると学校が変わり、良くも悪くもなるというのは、あってはならないことです。どの学校も教育の質は担保されなければならないはず。しかし、現実にはそのようなことが起きているから、「校長が代われれば…」のように世間では言われてしまうのです。まあ、どの世界でも、トップが代われればその組織の体質が変わるのはありがちなことです。

ある教育長が「理科専門の校長が赴任してきて、天体観測できる天文台がほしいと言うので作ったら、次の校長は生徒指導上良くない建物なので壊してほしいと言ってきた。校長が代わるとこうも違うのかと驚いた。それと同時にこれではいけないと思った。」とおっしゃっていて、早々にコミュニティスクールを立ち上げました。教育の質を保ち、地域の特色を生かした教育を続けていくための制度を確立したのです。この教育長は、「その後、校長が代わったからと言って、学校の体制が変わるということはなくなった。」と述べています。コミュニティスクールの導入は、地域の学校づくりには必要なことなのです。

話は変わりますが、私は13年間教育行政に身を置きました。その間、社会情勢が変わり国や県の施策がどんどん変わってきている中、教育行政の施策も年々変わってきました。私は、その渦中で「前年と同様」というのはあり得ないということを感じさせられました。学校は、同じことを継承する文化が浸透しています。私は、行政に入りたての頃、自分が作成した計画が採用されず、自分の発想力のなさに自信を失いかけてました。その後、今までの施策は白紙に戻し、新たなものを創出することを常に考えてきました。そして、「社会が変われば、子どもが代われれば、学校も変える。」と考えるようになりました。この考え方は、今回のコロナ対策に生かされた自分なりに考えています。

「校長が代わっても、学校は変わらない。」「社会が変われば、子どもが代われれば、学校も変える。」という考え方は、学校を変えるはず。です。

「あれ、何か楽しいことがあるの？」

休み時間のことです。1年生の女の子たちが廊下をスキップして通っていきます。そのスキップは、まるで「ピョンピョン」という音が聞こえてくるかのような、それはそれは楽しそうなスキップです。

「ねえ、何が楽しいの？」

私も一緒にスキップをしながら、もう一度聞いてみました。しかし、子どもたちはお互いの顔を見合いながら「フフフ」と笑うだけです。

子どもたちにとって、仲良しの友だちと一緒にいること、それだけでとにかく楽しいことなのです。(後略)

私が発行する学校通信「かえで」は、このような子どもたちの会話や行動を取り上げ、子どもたちの「何気ない日常」を伝えるようにしています。

学校通信というと、保護者に向けた行事等の連絡やお知らせ、学校からのお願いなどを伝えるものが多く、どちらかと言えば「読む」というよりも「確認する」ことが多い内容になりがちです。その一方で、校長の学校経営方針や教育に対する思いが掲載される場合もありますが、どうしても固い印象があり気軽には読めません。

そこで、学校からの連絡やお願いは通知文書やメール等で別に行い、学校通信は、保護者だけでなく子どもも気軽に読めて、学校通信が親子の対話の架け橋になることを願って発行しています。そのために、難しい言葉や言い回しを避け、できるだけ子どもの言葉をそのまま紹介するなど、誰にでもその場の雰囲気や伝わるようにしています。また、「今週のもんだい」として、親子で挑戦できる算数の問題を出題し、翌週に答えと解説を掲載しています。

学校通信「かえで」は、保護者からも好評を得ており、保護者へのアンケートでは、次のようなありがたい言葉をいただいています。

○校長先生の文章は、いつも物語のように読みやすく、ときには共感したり、ときには考え方や子どもとのやりとり「さすがだなあ」と思ったり、いろいろと学ばせていただいております。校長先生の子どもたちに対する思いが伝わり親子の会話のきっかけになっています。

○「かえで」を読むと、いつも三小の楽しい出来事が分かり、子どもたちが楽しい学校生活を送っているんだなと感じます。校長先生からの問題も解くのが楽しみです。

もうすぐ2校3年8ヶ月間の校長生活が終了を迎えます。校長として、特にこれといった実践を残せなかった私ですが、子どもにも保護者にも喜んでもらえる学校通信の発行を継続できたことが、ほんの少しだけですが誇りに思います。

教員生活を振り返って

Thank You ～39年に感謝を込めて～

白河市立白河第五小学校長 菊地 好博

ある講演会での「小学6年生は、10年後には変化の激しい社会に出て生きていかなければならない」という言葉が強く心に刻まれました。この言葉が、今の自分の教育に対する根っこになっています。若い頃は、学力テストや様々な大会等で結果を出すことが、ある意味大きな目標だったように思います。当然、授業も知識や技能を効率よくどの子にも理解できるように工夫したり読み書き・計算等の基礎となる内容を確実に定着させたりすることに指導の重点を置いていたと思います。でも、その講演を聴いてから、本当にそれだけでよいのかと思うようになりました。もちろん目に見える学力を高めることや数値目標を立てて、それを達成することは大切だと思いますが、本来の教育の目的である「人づくり」を忘れてはならないと思っています。

校長として、学校経営を任されるようになってからは、「子どもたちが変化の激しい社会に出て行っても困らない力」の基盤となる力をつけることをめざし、キャリア教育の充実を学校経営の基盤に据えてきました。キャリア教育というと進路指導や職業指導と思われがちですが、最も大切なのは、社会に出たときに生きていくための能力や前向きに取り組む意欲等を育てることにあると思っています。普段の授業でも様々な活動でも、その能力を育てることや意欲を高めることを意識して展開していくことで、授業や活動の内容が変わってくると思います。社会の変化が激しい時代だからこそ、何が子どもたちに必要なのかを見極め、改善していくことも大切だと思っています。

教員生活最後の年は、コロナ禍で大変な1年となりましたが、38年間を振り返れば充実した教員生活だったと思います。多くの先生方は、教員を夢見て志を高く持ってなられたかと思いますが、私は、どちらかというところ「でもしか」だったように思います。ただ、たくさんの素晴らしい先生方や子どもたち、様々な方々との出会いにより、教員としてのやりがいや素晴らしさを学ばせていただきました。また、その方々に支えていただき、今があります。出会ったすべての方々に深く感謝いたします。ありがとうございました。

西郷村立小田倉小学校長 原 豊子

昭和57年4月1日、初任地は海に見える漁港近くの学校でした。保護者は漁師の方が多く、一度出港すると半年は家に戻ることができないため、北洋サケマス漁業船団の見送りが学校行事になっていました。数多くの漁船が大漁旗を掲げ、色とりどりの紙テープをはためかせて出漁していく光景は今でも目に焼き付いています。海岸を走る持久走大会、砂の造形展、海洋少年団の活動など、特色ある貴重な体験をさせていただきました。

平成元年4月1日、「希望の桜」がシンボルの3校目に着任しました。古い木造校舎でしたが、床がピカピカに磨きあげられた伝統ある学校でした。道徳教育の文部省指定を受け「総合単元的な道徳の時間」の研修に励んだことや校舎改築の話し合いをしたことが強く思い出に残っています。

平成19年1月1日、途中人事により、学級担任だった私が、教頭として6校目に着任しました。当時の校長先生、児童、地域の皆さんが温かく迎えてくださったことが忘れられません。里山学習や炭焼き体験などを通して地域と深く関わり、学校は地域に支えられていることを学びました。

平成31年4月1日、最後となる学校に着任しました。この日は、新元号の発表があった日です。「令和～人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ～」の優しい響きに胸を躍らせました。

令和元年5月1日、新しい時代が幕を開けました。小田倉小学校は、自宅から見え、我が子が入学し、震災直後に教頭として勤務した特別な学校です。校長の任が務まるのか不安の毎日でしたが、多くの方々に支えていただき、「東京オリンピック・パラリンピック」の熱狂とともに退職を迎えられるものと思っていました。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大がそれを許してくれませんでした。全国一斉臨時休業、新しい生活様式など、今までの経験では対応できない様々な判断が求められました。悩み、苦しむ年でしたが、児童や先生方、保護者、地域の方々、そして校長会の先生方に力添えをいただき、退職を迎えられることに「感謝」の気持ちでいっぱいです。思い出多い教員生活39(サンキュー)年に心から Thank You、ありがとうございました。

「with コロナ」でもドリカムな学校経営

日々是研修

白河市立小野田小学校長 佐久間 芳雄

4月に再任用校長として本校に赴任した。新型コロナウイルス感染防止対策を行いながらの教育活動は、誰も経験したことのない手探りの学校経営で、様々な課題にどう対応するか、新型コロナウイルスと知恵比べをしているようだ。

これまでの自分の経験を総動員するとともに教職員の知恵を集めて対策を練りながら、白河市教委のご指導とPTA会長の了解を得て実践へ移していった。

●課題① PTA総会が開けないので、保護者への校長あいさつができない。

→ YouTube の限定配信を使って、校長あいさつのビデオをアップし、保護者に送信した。

●課題② 4月中旬から臨時休校になり、学校での教育活動がストップしてしまった。

→ 子どもたちの自己マネジメント力をつける機会と捉え、家庭学習の計画(時間割)を子どもが自ら立てて、取り組めるようにした。

●課題③ 授業参観をやりたいが、子どもと保護者が教室内で密になる危険がある。

→ 1学期の授業参観は行わないこととし、学校での子どもたちの様子を見てもらうために、YouTube に学級紹介のビデオをアップした。

●課題④ 5月の運動会を10月10日(土)にずらしたが、台風のために開催が危ぶまれた。

→ 10日(土)に体育館で開会式と一部の種目(親子種目、よさこいソーラン、鼓笛隊)を第1部として決行し、繰替休業日後の13日(火)に校庭で聖火リレー、徒競走、チャンス走、全校リレーと閉会式を第2部として行った。よさこいソーラン、鼓笛隊も再度演技を披露した。

学校は子どもたちが交流しながら学ぶ場である。感染防止対策をとりながら、本校にとって、何が大事な教育活動であり、どうすればできるかを考えることは、学校の贅肉をそぎ落とすダイエットであり、「学校の新しい様式」を作り出すことでもある。「with コロナ」は、ピンチをチャンスに変えて果敢にチャレンジし、学校を変える絶好の機会なのである。教職員みんなで力を合わせ本校の未来予想図を設計し、「ドリームズ・カム・トゥルー」な学校づくりを進めていきたい。

東西しらかわ小学校長会研究部長 金子 秀則
(白河市立信夫第一小学校長)

県南に戻ったうれしさにホッとする間もなく、いきなり研究部長という大役を仰せつかり、身の引き締まる思いで過ごしてまいりました。不慣れと力不足が重なり、いろいろとご迷惑をお掛けしましたこと、心よりお詫び申し上げます。

また、コロナ禍にあつて、県の研究部長会も東西しらかわの研修会も開催されないまま支会大会を迎えることとなり、担当として大きな不安に駆られました。メールや電話でお示ししたりお願いしたりするしか術がなかったのですが、研究委員長様を中心に各班で周到にご準備いただき、当日は5つの素晴らしい発表と質疑によって有意義な時間となりましたこと、心より御礼申し上げます。

ところで、私は、新任教頭の時、次年度の県教頭会での発表者になってしまい、「ただでさえ忙しい教頭が、なぜ研究などしなくてはならないのか」と、愚かにも思ったことがありました。“研究のための研究”といった、貧しい発想しかもち合わせていなかったのです。

教頭の仕事にも慣れ、ようやくわずかながら思索に耽る時間ができたある日、担任時代に本気になって打ち込んだ“教材研究”や“生徒指導事例研究”をふと思い出しました。研究は実践のためであり、実践の中に研究はある、という当たり前の事実。それは、職が違えども共通の事実であるということに、改めて気づかされたのでした。

県校長会の研究の目的は、「～研究の成果と課題を踏まえ、各校長が、自校の教育活動の一層の改善・充実に向け、自らたゆまなく実践を積み重ねるとともに、互いにその成果の共有を図り、学校経営の力量を高める～」と手引きにあります。実践を通して研究を深め、研究の成果を実践に活かす、ということは校長にも求められています。

対象のための“研究”だけでなく、自身のための“修養”も、教育基本法と教育公務員特例法に我々の義務や権利として定められています。禅語の「日々是好日」ならぬ「日々是研修」との思いを胸に、今後も校長の職、研究部長の役を務めさせていただきます。

どうぞよろしく願いいたします。